

- 1、プロログに似ている
- 2、白いギターのはなし
- 3、バナナのはじまり
- 4、202号室のタイムマシン
- 5、バナナのつづき
- 6、トラックを買いに行こう
- 7、バナナのまんなか
- 8、○と□と△と
- 9、バナナはたべごろ
- 10、アナザーロード
- 11、バナナのたそがれ
- 12、彼女は万畑悠季と呼ばれている
- 13、草原の果て
- 14、もう一度、白いギターのはなし
- 15、バナナのおわり
- 16、エピログの少し手前
- 17、THIS IS バナナ

卵を片手で割ることのできる女性はロック。  
だと僕は思う。

知り合いの女性が卵を片手で割っていたら大抵の男は一発で惚れてしまうし、割られた卵の殻も、どこか満足げな雰囲気であるに違いない。

ふはあ。満面の笑み。  
しかし一方で、周囲からロックと思われないがために、卵を片手で割る女性は、ロックとはずいぶんと掛け離れている。

ロックと思われない片手卵割り女子。

彼女はたぶん髪を派手な色に染めているし、たぶん服も派手な色に染めているし、目も派手な色に染めているだろう。

割られる瞬間の卵の声を聞いてみると良い。

南国の怪鳥のような声をしている。

そう、ロックとは、水よりも純粋な感情のことを指しているのだ。天然の風のように透明で、ガラスのナイフのように脆い感情。そこに一切の濁りはない。濁りがあつてはいけない。ほんの少しの見栄もプライドも、欲求さえもあつてはいけない。

無色透明。無味無臭。

だからこそロックは、分厚いコンクリートの壁にも突き刺さる。

そういう意味で言えば。

そういう意味で言えば、彼女は確かにロックだった。

万畑悠季。

昔ながらの木造アパートに住み、釣り竿一本担いで夜釣りに向かう。魚のように飄々と日々を過ごし、大きな

岩の下で、来るべき時代をのんびりと待っている。そっだ。

彼女は確かにロックだった。

僕は基本的に自分の人生をやり直したいとは思わない。後悔もしない。たとえ時間を巻き戻せたとしても、僕はどうせ同じ選択をするだろう。

なぜなら、僕は常にそう思うようにしているからだ。

ただ唯一。

唯一、僕がやり直してみたいと思うことがある。

それは、小学生のときに、保健室のドアノブを粉々に粉砕してしまったことでもなければ、好きな女子の脳天に、かかと落としを決めてしまったことでもない。

僕がやり直したいのは大学時代そのものだ。

とは言っても、僕の過ごした大学生活が決して退屈だったわけではない。勉強にはそれなりに励んでいたし、毎日気持ちの良い汗を流していた。それらはちゃんと今現在の僕の血となり、肉となり、骨となっている。決して無駄だったとは思わない。

むしろ、十分過ぎるほど充実した大学生活だった。

でも、それでも、僕は大学生活をやり直してみたいと思う。

\*

僕はこれまでに幾つもの小説を書いてきたし、何人も女の子を小説の中に登場させてきた。

ある女の子は海岸線で歌を口ずさみ、ある女の子は映画館で全裸だった。ある女の子は「大好き」の意味を盛大に履き違え、ある女の子は後頭部から血を流していた。女の子達はそれぞれにそれなりの個性があって、それ

それぞれなりに面白い生き方をしていた。

でもこうして改めて並べてみると、彼女たちは別人のようでどことなく似ている。

似ている。

どこか。

どことなく。

みな、万畑悠季に似ている。

万畑悠季。

大学時代に巡り合った、岩の下の巨大魚。

この小説は、僕にとって一つの大きな区切りだ。だからこそ僕は、彼女について、少なくとも五ページは書く必要がある。

そう勝手に思っている。

ちなみに小説は全部で十ページにするつもりだ。

五ページは彼女のために。

もう五ページは僕のために。

だからちょうど、卵の殻のように半分半分ということになる。

## 2、白いギターのはなし

単純に空の色とは言っても、空の色は季節によってだいぶ違う。

気がする。

だから僕は次のように定義することにした。

空色とは、良く晴れた夏の日の午前二〇時から午後三時までの間、水蒸気や埃の影響の少ない大気の状態にお

ける僕の家から五〇〇メートル以内の上空を、厚紙に十センチ四方の穴を開けてそれを目から約三十センチ離してかざし、その穴を通して観察した色のことを指す。云々。要するに、空色とは水色よりも少しだけ空に近いものであればいいのだ。

そしてそんな空色がとても綺麗で、炭酸水のように雲がぼこぼこ湧き出る日の昼下がりに、彼女は僕の目の前から鮮やかに去っていった。

まるで端からそこには誰もいなかったかのように。がらん。しーん。

\*

部屋にはその人の人生観が表れる。

これは僕の持論だ。

物で溢れかえっている部屋には生活感がある。

美しく整理整頓されている部屋には清潔感がある。

空洞のように何も無い部屋には、何もない。

万畑悠季の部屋は実に混沌としていた。まるで西洋の古い地図のようだった。ありとあらゆるものがインクのようにとつちらかり、まるで大陸の地層のように堆積していた。

そんな感じで何一つとして物を大事に扱わないように見えた彼女だったが、白いギターだけは違った。

胴体が牛乳のように光り、英字が美しく書き殴られているシンプルで良質なギター。

部屋の隅に立てかけられた名も無きギター。

彼女がそのギターを弾いているところを僕はほとんど見たことがない。触るところもほとんど見たことがない。

ほとんどない。

一度だけある。

でも僕は、彼女の演奏がどんなものであったかあまり良く覚えていない。

歌は上手だったか。演奏はどうだったか。曲はオリジナルだったか。

あまり良く覚えていないということは、おそらくそう大したものではなかったということだろう。

彼女には悪いけど。

なにせ僕は、あまり良く覚えていないということを含んでもしっかりと覚えているのだ。

そしてあまり良く覚えていないということを含んでもしっかりと覚えているということは、やはり彼女の演奏は、おそらくそう大したものではなかったということだろう。

なんてことを当時の僕は考えて続けた。彼女が去ってから一か月ぐらいの間ずっと考え続けた。いた。

そのせいか、僕は彼女が白いギターを演奏している夢をよく見る。

今でもよく見る。

空が綺麗で、灰色の雲が流れていて、白いギターがあつて。

そして目を覚ました時には、彼女の演奏がどんなものであったか、全然覚えていないのだ。

### 3、バナナのはじまり

僕は昔からバナナが好きだった。

黄色いペンキを塗ったかのように鮮やかな皮とか、ペ

ンチでぐにやりと曲げた感じの实の形とか、草原を駆け抜けるかのように爽やかな甘みとか。

バナナには妙な魅力がある。

そして、その中でも僕は格別、バナナジュースが好きだった。

もちろん今でも好きだ。

なによりも好きだ。

なによりも好き、すぎて、変な夢を見た。

ずいぶんと懐かしい夢だった。

ずいぶんと懐かしい人が出てきて、ずいぶんと懐かしいことを言った。

そしてずいぶんと懐かしい気持ちで目を覚ますと、ずいぶんと懐かしいベッドの脇にずいぶんと懐かしいバナナジュースが置いてあった。バナナジュースはずいぶんと懐かしいコップにずいぶんと懐かしい感じで注がれていた。

た。ふた。ふ。

そんな夢だった。

\*

僕はバナナについて書く。

バナナというものは面白い。

形の無いもの——それは喜び、哀しみといった類のものだけではない——を、やりようによってはなんとか形にすることができる。形あるものはいつか灰のように崩れ去って消えていくが、形のないものを形にした場合、それはいったいどのような結末を迎えるのだろうか？

2019年の夏。

僕には一人の友人がいた。

名前は森下亮介。

彼は背が高かった。

水を与え過ぎた街路樹のように背が高かった。

\*

当時の僕はバナナジュースの研究をしていて、森下は水草の研究をしていた。

こんな感じで。

「甘ったるくて頭がおかしくなりそうだ」

森下は顔をしかめながらそう言う。

午前十時、冷房のないサウナのような教室で。

僕は彼からカップを受け取ると、別のバナナジュースを差し出す。

彼はこれでもかというほど眉間にしわを寄せると、ぐ

びぐびとそれを飲み干す。

「さっきよりは上品な甘さだ」

「おお」

「でも深みがない」

彼は不快そうにげっぷをする。

僕はそれを見届けると、教室の隅から大きな水槽を掘り起こし、近くの川へと向かう。そして彼の研究に役立つような水草を山盛り採ってくる。

僕は、僕だけの、美味しいバナナジュースが作りたかったのだ。

#### 4、202号室のタイムマシン

半分は万畑悠季という女性について話をしたい。そういう約束だったはずだ。

さて。

最初にも言った通り、彼女は間違いなくロックだった。カッコいいとか、強いとか、そういった言葉ではなかなか言い表せない何かがあった。既存の言葉では表せない何かがある。

たとえば。

未来を予知できるとか。

彼女は言う。

ある日、自分の部屋にタイムマシンが現れた。

クーラーの効いた日のことだった。

タイムマシンは使い古したアメ車のような感じだった。

赤くて、四人乗りで、ビートルのようでした。

運転席に年、月、日を入れるダイヤルがあった。

適当にレバーを引いたら、ぐにやりとなって時空を超えた。

「そういうわけで、タイムマシンを使えば、私は未来に

起こることをある程度知ることができる」

現存する日本語で強いて彼女を言い表そうとするのであれば、やはり「ロック」ということになるのだろう。

もちろん、最大限の敬意を込めて。

\*

空き地に見捨てられた古い蔵のような部屋に住んでいた万畑悠季だが、この部屋には一つ困ったことがあった。ゴミが一つたりともないのである。

つまり、部屋を片付けるといふ行為自体が正しいのかどうか、それすらもわからなくなるような、そんな不思議な空間だったのだ。

「秩序ある混沌だぜ」と彼女は言う。

そんな秩序ある混沌の中、その釣竿は比較的上のほうから発掘された。

部屋に堆積した地層の上のほうから。

そして僕は以前も、同じ釣竿を同じところから採取したような気がする。

つまり。

彼女は、

彼女はずいぶんと釣りが好きなのである。

彼女は決まって夜に出かける。

\*

彼女の住むアパートの裏手には鬱蒼とした森が広がっていて、ぐねぐねとした川がその中をゆつくりと流れている。ゆつくりと。でもしつかりと。そこに確かに存在しているかのよう。

川のあちこちに人の背丈くらいある巨岩が転がっている。そのすきまに太古から住みついている巨大魚が姿を隠しているような、そんな感じがする。

古い場所だと思った。

ずいぶんと昔からその姿を変えていない。

風が吹いて、まるで喋っているかのように草木がざわざわと揺れた。

「最近の川はどうもよくない」とほとりの草が言った。

「へえ」

「流れがずいぶんと早くなった。早すぎると言ってもいいかもしれない。焦ってるようにもみえる」

「良くないことなのかな」

「ああ。良くないね。何事も焦りは禁物さ。今までだって、焦った結果、一度でも良い方向に転がったことがあるかい？ あるか。うん。そりやまあ一回くらいあるよな。人間だもんな。なんにせよ、駆け足の川では大きな魚は育たないぜ」

「そういうものかな」

「そういうもんさ」

ランプ灯が僕の背丈の三倍はあろう、巨大な岩を照らしている。満月が地面に落ちてきて、そのまま忘れられた、みたいな。

その巨岩の下に、彼女はじっと座っていた。

じっと座って、じっと魚を待っていた。

やがて彼女はポツリと呟いた。

「最近の川はどうもよくない」

「流れが速すぎるんだろ」

「彼女は、お、お、と、後頭部をポリポリと掻いた。

「良く分かったね」

「見ればわかる。何事も焦りは禁物さ」

彼女は釣竿を構えたまま、眠そうに欠伸をした。

「麦草くんてさあ」

あふ、と息を漏らす。

「たまにきもいよね」

「たまにね」

「そういうことかね」

僕はポケットから煙草を取り出して火を着けた。

風は妙に静かで、川の音だけがどうどうと鳴っている。

「釣れないねえ」と彼女は呟いた。

「僕は釣りをしないからよく知らないんだけど」

「おん」

「川の魚を釣るのに、夜は適してるのかい」

彼女は煙を手で払った。

「川の魚ってのは、夜は基本ぐっすり眠ってるね」

「じゃあ釣れないのでは」

彼女は僕の方を見ると、わかっているいなあ、という感じに肩をすくめた。

「そっだよ。基本はね。だから普通の魚は釣れない。普通じゃない魚が釣れる」

「なるほど」

僕は彼女の持つ竿を眺め、釣り糸を眺め、そして川面を眺めた。

普通じゃない魚ってなんだ？

「見ればわかるよ」と彼女は呟いた。

僕はもうあまり彼女の方を見ないことにした。

遠くに朽ちた橋が架かっていた。

雨の一滴でも落ちてきたらガラガラと崩れ落ちてしま

いそうな、そんな由緒ある橋が架かっていた。

僕は煙草を吸いながら、ジッとそれを眺めていた。

ふっと橋の下を何か横切った。

巨大な銀紙のような何かだった。

そいつは川の中でぐるりと小さな円を描くと、深い暗闇の中に消えていった。

結局のところ、魚は一匹も釣れなかった。

「そういう日もある」と彼女は残念そうに言った。

僕はあまり残念ではなかった。

## 5、バナナのつづき

バナナジュースとは言っても、ただバナナを絞ればいいという話ではない。なぜなら、バナナジュースとはバナナを含んだありとあらゆる飲料の総称だからだ。

バナナ・オレ、バナナシエイク、バナナスムージー、

バナナコーヒー……

つまりだ。

バナナジュースという言葉は、ある意味すごく完成された言葉であり、ある意味ひどく不完全な言葉だとも言える。

この事実から受け取るべき教訓はなにか。

僕は必死に考えた。昼夜を問わず考えた。月曜日の憂鬱な体育の講義も、水曜日の退屈な美術の講義も、木曜

日の楽しい言語の講義も、僕はとにかく考え続けた。

なぜなら、そこそこが、美味しいバナナジュースを作るための最大のヒントではないかと思っただからだ。

そしてそれは結果的に見れば、あくまで最終的な結果

からすれば、間違っていないなかったのかもしれない。

たぶん。

\*

2019年の夏だ。

バナナの自動販売機がこの世から失われたのも、ちょうどこの頃の話である。

当時——つまり2019年——のさらに二年前。田園

地帯を走る畦道の脇にポツンと一人、寂しそうに立っているのを見たのが最後だ。それ以降、僕はバナナの自動

販売機を確認したことはない。

何であれ絶滅を確認することは非常に難しいことであるが、街にその気配を感じなくなつたというのは逆らいがたい現実としてそこにある。だから僕はバナナの自動販売機は絶滅したものだと思っている。

絶滅。

残らず絶えること。

新しすぎたのか、過ぎ去つたのか、それとも忘れられたのか。

いずれにせよ、銀色の小銭を幾枚か投入してボタンを押すだけで、実に美味しい黄色いジュースを生み出してくれる、あの魔法のような機械はもう存在しない。

悲しいことに。

でもふとしたときに思い出すことはある。

ふとしたときに思い出してくれる人間がいるだけで、バナナの自動販売機は、まだ恵まれている方なのかもしれない。

ほとんどの言葉は思い出されることもなく、遠い彼方へと過ぎ去っていく。

たとえば、電車の窓から見えた火葬場の煙突とか。

## まあそんなことはどうでもいい。

美味しいバナナジュースを作るといふのはそう簡単な話ではない。

「バカだな」と事あるごとに森下は言う。

もちろん僕に向かってだ。

そして彼の言う通り、僕はそこそこバカだった。

なにせ、美味しいバナナジュースを作るには、美味し

いバナナと美味しい牛乳を用意すれば良いと思っていた

のだから。

\*

「お前、美味しいバナナジュースを作るには、美味しいバナナと美味しい牛乳を用意すれば良いと思ってるだろ」

森下は僕の作ったバナナジュースを飲みながら言った。

三〇度を超える猛暑日が続いていた。

壊れかけのラジオがガーガーと鳴っている。

「今年一番の暑さになるでしょう……天気晴朗……」

……今年一番の暑さとなるでしょう……なれど……

……今年一番の暑さに……波高し……」

セミだろうとカブトムシだろうと、暑ければ死ぬ。

暑ければ死ぬのであれば、なにか対策を講じなければならぬ。

「バナナはあくまで結果だぞ」と森下は言った。

「土があつて、苗があつて、人が育ててさ。嵐とかもく

ぐり抜けて、そんでようやく市場に出回ってくるわけだ。

地層のように積みあがった歴史の上に、バナナの実がな

っているんだろ」

「なるほど？」

「それを語らずしてバナナを語れるわけがなからうよ」

「なるほど」

その理屈で言うならばだ。

土はきつと耕されている。耕すには道具が必要だ。エ

ンピカー——シャベルかもしれない。シャベルには何が使

われているだろう。鉄か合金か。いずれにせよ溶鉱炉か

らやってくるに違いない。溶鉱炉で溶かされるのは

鉱石だ。鉱石はどこから来ている？ 水はどうだろう。バナナに与える水はきつと地下水を使っているに違いな

い。食用植物を育てるには自浄作用の強い水を使うのが鉄則だ。地下水は何処から来た？

そういった要素が少しずつ積みあがって、段々とテイ

ラミスみたいな地層になっていって、そしてその上にち

よこんとバナナが生る。

バナナはあくまで結果でしかない。

なるほど？

僕はこの時はじめて、とてつもなく広い森の入り口に

立っていることを知った。

大学二年の夏のことだった。

## 6、トラックを買いに行こう

彼女は中古車を眺める趣味があつた。

そのことに気がついたのは、片づけの途中で古い雑誌

の層に到達したからだ。

どの雑誌にも色とりどりの車が載っていて、そのどれ

もが既に手垢のついたものだった。

そう、まるでマンハッタン島にある有名な交差点のよ

うな、そんな感じだ。

ビルボードが多く観光客で溢れかえって一見すると華

やかではあるが、裏路地の構造は複雑で、すりやぼった

くりのオンパレード。

偽物も多い。

\*

当時の僕らは当時の大学生らしく、まったくお金がな

かつた。

特に彼女は物欲が凄まじく、豪快に散財するくせがあ

つたから、川で釣った魚がそのまま晩ご飯、なんてこと

も少なくなかつた。もちろん魚が釣れない日もあつた。

もちろん魚が釣れなければ、もちろん晩ご飯などなく、

もちろん彼女の機嫌も悪い。そしてもちろん、その割を

食っていたのは僕だった。

僕の話はいい。

そうだ。つまり、当時の彼女が中古のトラックをかう

お金などある筈が無かつたのだ。

もちろん僕にも。

毎月五万でやり繰りしていた。食費が一万。あとは光

熱費とか。

僕の話はいいのだ。

人はなぜ古いものに惹かれるのだろうか。

古着、古道具、古い音楽、古民家、タピオカミルクテ

ィー。

僕はどうにも、その裏には時間のトリックがあるよう

に思えてならない。新しいもの、時代を掴んだもの、過

ぎ去つたもの。そこには時代を席卷したバンドが突如解

散し、数十年後に再結成するアレとよく似たものがある。

気がする。

中古車と言ってもピンからキリまである。一〇〇万を

普通に超えてくる大物もあれば、地元の小さな店の隅で

埃を被っている一〇万くらいのもある。

「麦草くん、金貸してよ」

彼女は、まずそうに炭酸ジュースを飲んだ。

「中古のトラックを買いたいんだ」

彼女の住む小高い丘の上のアパートには良いところが

三つあつた。

窓からの景色が綺麗なことと、駐車場が広くて野良猫が集まって来ることと、夏には涼しい風が吹き抜けることだ。

「シンプルに嫌だし、そもそもトラックを買い取る金なんてない」

僕がそう言うと、彼女は灼熱の縁石に腰かけたまま、空気の抜けたサッカーボールのようにベコベコに凹んだ車の下を覗き込んだ。

「五万あれば十分なんだけどな」

「五万で買えるトラックなんてあるかい」

彼女はやれやれという風に肩をすくめた。

「足りないなら増やせば良いじゃない」

「どうやって」

「競馬」

車の下から猫が走り出てきてにやおんと鳴いた。

「大丈夫だって。前にも話したでしょうが。タイムマシンのこと。私にとっちゃ、お金を増やすなんて造作もないことさ」

そんなわけで、と彼女は続ける。

「五万貸して」

「擦ったら今月生活できないんだけど」

「絶対大丈夫だって」  
僕は猫を追いかける彼女をじっと見つめた。灼熱のエアリアルトの中、涼し気な顔で、汗一つ掻いていなかった。

「まあいいよ。じゃあ」と僕は言った。

彼女は猫を追いかける足をピタッと止めると、不可解なものを見る目で僕を見た。

「麦草くんてさあ、たまにきもいよね」

「ひどいな」

「今の流れでOKを出す奴は、きもいよ。この世に五人とないだろうね」

向こうの空では、セミの音を掻き消すように飛行機がずいぶんと低いところを飛んでいた。

「じゃあ僕がその五人で良かったな」

「そういうことかね」

使っちゃいけない金に手を出した拳句「絶対大丈夫」とか言って競馬に行った人間の中で、成功する奴は果たして何人いるだろう。

十人くらいだろうか。

いや、五人もいないかもしれない。

なにせよ、その五人の中に彼女は入る。

## 7、バナナのまんなか

昔から、僕の書く小説は券<sup>券</sup>困<sup>困</sup>気<sup>気</sup>だけだとよく言われる。

なぜだろう。

なぜ僕の小説には、先人たちのような弾む音がないのだろう。

五線譜を疾走するような美しさもなければ、ギターが捻じ曲がるような歪みもない。

あるのはそれっぽい言葉と、それっぽい文章だけだ。

もしかしたら、小説は宇宙のようなものなのかもしれない。

\*

バナナはあくまで結果でしかない。

ということに気がついたから、過程から精査することにした。

大学二年の夏だ。

連日、とにかく暑かった。角のタバコ屋の看板が歪んで見えるほど暑かった。

だからどうというわけではないけど。

街の東には鬱蒼と広がる森がある。

森はどこまでも広がっていて、果てが見えない。森は昼間でも真つ暗だし、その中にわけ入っても何が手に入るか分かったものじゃないし、深海生物を見た時のような不気味ささえある。だから大抵の人はそれを目にして、気がつかないふりをしたまま素通りする。

たぶん。

だけど僕はこの森を目にしたその瞬間から、その存在に惹かれて仕方がなかった。人氣がなくて、深く、暗くて、どこまでも同じような景色が続いている。一度入ってしまったら、二度と戻って行くことはできないような。

でもきつと、森の中には僕の求めている物がある。

そんな気がしたから、僕は森の中へと足を踏み入れた。大学生などそんなものだ。

人の直感<sup>直感</sup>は七割当るといふ。

もし僕が残りの三割を引き当てていたら、僕はその程度の人間だったということだ。

\*

正直、森の中に入ってからのことはあまり良く覚えていない。

あまり良く覚えていないけど、ただただしんどかった

という記憶だけはある。

はじまりは小さな感情だった。

気取って言うのであれば、それは僕の中に初めて生まれたポエジーのようなものだったのかもしれない。初めて生まれたというか、初めて認識したというか。

それは小さいながらもしっかりとした意思を持つていた。誰だって二十年も生きていれば、その人なりのポエジーくらい持っているものだ。

なにせよ、その意思に従って茂みに足を取られながら生傷を増やしていったら、小さな感情はやがて海岸線という形を成していった。

途方もない森の中で見つけた、初めての命だった。

## とかどうでもいい。

要するに道があるようで道がなく、地図があるようでありながら、なにかを得たようでも得ず、という道のりを延々と歩いてきたのだ。それも途方もない時間にかけて。

深くて不快な沼にはまって泥だらけになり、道端のエリンギをもしゃもしゃと餌えをしのいだ。

というのにはさすがに冗談だ。

ただ、真つ暗闇の中を手探りで進んでいたのは事実で、傍から見ればそれは凄く滑稽なことだったのかもしれない。

なにせ僕は何もないところで必死にバタバタもがいていただけなのかもしれないのだ。

ずいぶん長い行脚だった。

足が棒のようになり、やがて棒になった。

このままどこにもたどり着かないのではないか。

そんな小さな不安が何筋も心を駆け抜け、さすがにしんどくて足が止まりかけ始めたそのとき、突如として森が終わった。

そして僕はそこに出た。

見渡す限りの広い草原だった。

遠くに地平線が見えるような、そんな広さだ。空には銀色の雲が浮かんでいて、遙か遠くの一点を指すようにゆっくりと流れている。

どこかに辿り着いたのは確かだった。

東の方に少しばかり盛り上がった丘があった。背丈の低い草が沢山生えていて、夏の日の影のようにゆるやかに揺れていた。僕は丘の頂上にある木を指して、ゆっくりと歩いていった。木はまるで誰かを待っていたかのように、そこから動くことはなかった。

丘を登り切った途端、強い風が吹いて、突き刺すような光が飛び込んできた。

やはり草原はどこまでも広がっていた。

僕はおそろおそろ後ろを振り返ってみた。

同じことだ。

森がどこまでも広がっている。

どこまでも、どこまでも、どこまでも。

果てしなく。

そこで僕はわからなくなった。

今、僕が持つべきものは希望なのか。

深い絶望なのか。

それとも？

丘を下った森のすぐそばに、今は廃墟となった掘立小屋があった。崩れ落ちそうな屋根のすき間から光が差し込んでいて、床には世界地図のような穴が開いていた。「久しぶりだな」と柵に置かれたシヤベルが言った。

そんな気がした。

僕はそいつを使って、草原の端っこにバナナの畑を作ることにした。

長い時間が経っていた。

大学三年の夏のことだった。

## 8、○△□と△と

彼女の部屋に堆積した地層と呼んでも差し支えないそれは、幾つかに分類することができる。

彼女曰く、上から新生代、中生代、古生代。さらに細かく分類すると、新生代は第四紀、新第三紀、古第三紀、中生代は白亜紀、ジュラ紀、三畳紀となる。新生代の古第三紀は漸新世、始新世、暁新世、中生代の白亜紀はマーストリヒチアン、カンパニアン、サントニアン、ユニアシアン、チューロニアン、セノマニアン、ザシアン、アルビアン、アプチアン、バレミアン、オーテリビアン、バランギニアン、ベリアシアン、とさらに分類できるらしい。

僕的には、上から大学生、高・中学生、小学生。大学生はデニム紀、Tシャツ紀、第二次中古雑誌紀、高・中学生は釣り紀、植物紀、第一次中古雑誌紀、小学生はポケ紀、カビ紀、マリ紀、モハ紀となる。

そしてそのスイカは植物紀の下層から見つかった。

もちろんスイカといっても種だけだったけど。



彼女曰く、そのスイカはもともとは四角だったらしい。  
「嘘だ」と僕は言った。  
「本当だって」と彼女は髪をいじくった。「それはそれは  
見事な立方体だったさ」

\*

スイカは駐車場の隅に植えることにした。  
焼けつくような日差しの中——大学二年生の貴重な夏  
休みの真つ只中、僕と彼女は駐車場の隅の土をほじくっ  
ていた。

「スイカの形って遺伝するもののかな」  
僕は首元のタオルで汗を拭いながら彼女に尋ねた。

「遺伝しない」

「四角いスイカの種を植えても？」

「四角いスイカの種を植えても四角いスイカは実らない。  
丸いスイカができるだけさ。そもそも四角いスイカは、  
小さいときから四角いケースに入れられて、人工的に作  
られるんだ。だから四角いスイカなんて、自然には絶対  
に存在しない。そんなことも知らないのかい」

彼女はどうかやら機嫌が悪いみたいだ。

口調も荒い。

もしかしたら四角いスイカを生み出す人間に怒ってい  
るのかもしれない。

いや、四角いスイカそのものに怒っているのか。

僕に怒っているのかもしれない。

「結局、環境次第ってことなのかな」

僕は小さく空けた穴に種を埋めた。

「なにが」

「スイカの話。環境さえ整えばさ、四角にも三角にも丸

にもなれるってことじゃない？」

僕がそう言うと、彼女は眉間にしわを寄せた。

眉間にしわを寄せた後、めんどくさそうに顔の虫を払  
った。

なんだか今日の彼女は本当に機嫌が悪い。

今日の彼女にはいつものウニのような可愛らしい棘と  
は違う、なにかナイフのような禍々しい鋭さがある。適  
当に喋ったらスパッと真つ二つにされそう。

「環境によって形が変わってしまうとも言えるし、変わ  
ろうと思えば変われるとも言える」

「なるほど」

「でも、大事なのはそこじゃないだろう。どのみち本質  
は変わっていない。どこまでいってもスイカは所詮スイ  
カだ」

「スイカの話だよ」

「スイカの話だよ」

\*

結局丸いスイカが二つ実った。

でも僕はそれを食べようとは思わなかった。

なぜなら二つとも、スイカによく似た別の何か見えた  
からだ。

## 9、バナナのたべどころ

せいっぱいだけだ。

きつと。

暗い病室で、どこからか助けを求める声が聞こえて来

たり、朝食のバナナを吐きそうになりながら食べたり、  
色々あるけど、それだけでせいっぱいだ。

あとどれだけ生きられるとか、元気ならばどんなこ  
とができたのだろうか、考えてる暇もない。

元気だったころの十倍の力を使って頭を起こして、不  
快なものだらけの血液を心臓から全身に送って、運ばれ  
てくる食事に吐き気を催して。

そうやって生きてるだけでせいっぱい。

ベッドで朝日を迎えるのでせいっぱいだ。

## 10、アナザーロード

ある日さ、タイムマシンが現れたんだ。

目の前に。

そう。あの時空を超えていく機械のこと。

ここに。

この部屋に。

誰も乗ってなかった。ただタイムマシンだけが空中に

パツと現れて、ゴンツと落ちた。

色は赤。ポートワインなんかよりずっと赤い。

なんだろうな。

言うなれば、中古のアメ車みたいな感じかな。そう。

ポンコツですぐにガス欠になるやつ。

操作の仕方は一目でわかった。

ダイヤルロックみたいに年月日を決めて、エンジンを

ふかすようにレバーを倒すだけ。

もしかしたらもつと複雑だったのかもしれないけど。

色々考えたよ。そりゃさ。他の人に相談するべきなの

かな、とか、もしかしたら持ち主が取りに来るかもしれ

ない、とか。

でも結局、使ってみようってことになって。楽しそうだからね。

それで色々考えた結果、五年後に行ってみようってことになったのさ。

色々は色々さ。色々あるのよ。

誰だつて。

実際使ってみたんだよ。

こんな感じでレバー引いて。

そしたらふわりと宙に浮いて、ぐにやりと時空が曲がって、ゴンッっていう衝撃が襲って来た。

場所は変わらなかったね。

おんなじ部屋だった。

見慣れた部屋。

でも私は住んでいなかった。

二十七のはずなのに。

もしかしたら引越したのかもしれない、なんて考えた。そんで探してみようってなったのよ。五年後の私が何をしているのか少し気になったからさ。

そこからは話すとき長くなるから端折るけど、色々な苦労を重ねながら、私はついに五年後の私と対面することになった。

大して長い話でもないな。

大学に行って所属を確認してもらって、とか、市役所

行って戸籍がどう、とか。そんな努力を重ねた程度。話が逸れたね。

そう。

私は五年後の私と対面することになった。

どうなつてたと思う？

聞いて驚け。

笑うなよ？

## 墓建つてた。

ウエエイ。

ロックだね。

笑ってくれよ。

笑ってくれた方が気が楽さ。

そっか。

真面目だな。

まあでもさ。

どうでもいいかもしれないけどさ。

一応、今キミの目の前にいる人間は、未来から来たってことになるんだぜ。

厳密に言えば未来に行つて戻ってきた人間だけだ。

そんなこんなで、私は大学卒業を待たずに死ぬ、ということがわかったわけだけど、そこからまあまあ色々考えたんだ。

やっぱり最初に考えたのはね、どうにかして死を回避できないかつてと。せつかくタイムマシンがあるわけだしね。死の原因を私自身で取り除けばいいんじゃないかって思った。

交通事故なら別の道に誘導すればいいし、アパートの床が抜けて転落したのなら引越させればいいし、調子に乗って死んだのなら調子に乗らせなければいいわけだ。

でもさ、死因が遺伝だとしてしようもない。

どうしようもなかった。

まあ一応、抜け道も考えなくはなかったよ。

死を回避する抜け道。

よくある話。

医学の発展を待つてやつ。

つまりさ、百年後だか二百年後だかわからないけど、

私の病気を治せる時代まで行つてしまえばいいのではつて話。もしかしたら千年後とかかもね。そんで治しても

らつたらまた戻ってくる、みたいなね。

ぶっちゃけさ、それを考えているうちによくわかんな

くなってきちゃって。そもそもどうして、タイムマシン

は私のところにやつて来たんだろ。何かの手違いか、操

作ミスか、それとも誰かが意図して送り込んできたのか。

なんにせよ、そこには私の知らない、大いなる力が働

いているつてわけだ。

ね。

どうなんだろうね。

それつてさ。

たぶんロックじゃないよね。

ロックかロックじゃないかの話だけで言えば。

たぶんロックじゃない。

そりゃあ生きたいとは思うけど。

でもそこに至つて、私はようやく目の前の機械の恐ろ

しさに気がついたんだよね。

使う前に気がつて話だけだ。

今度ばかりは、自分のことを少し殴りたくなつた。

実際殴つたしね。

こう、パンチングマシンを勢いよくやって、戻つて

くるのを食らうみたいなの。

ボン、ポボン みたいなの。

それはまあいいや。

のことである。

ねえ麦草くん。

私さ、タイムマシーンを見て思い出したんだ。

私が小さいころに、病気で死んだじいちゃんのこと。

余命を聞かされてからのじいちゃんて、どういう思いで生きてたんだろ。

ついぞきけなかったな私は。

きいていいのかわるいのか、さすがに判断できなかったんだろうね。

きつと。

でもこんなことなら、きいておけばよかった。

目の前の死を待つってどんな気分なんだろ。

ねえ麦草くん。

ね。

## 11、バナナのたそがれ

僕とバナナ農園の歴史は一年前に遡る。

さかのぼったとて何もない。

ただ僕が、シヤベル一本、土を耕し、風の吹くままに、バナナを植えた。

三〇平米、九坪、十八畳。

一年間、誰一人として土を踏ませなかった。

大事に大事に大事に大事に、バナナを育ててきた。

すべては美味しいバナナジュースのために。

この頃になると僕のバナナジュースのレシピもかなり完成へと近づいていた。もちろんそれはバナナジュースの完成のことではない。バナナジュースのレシピの完成

バナナ …………… 一本(中)

牛乳 …………… 一五〇ミリリットル

氷 …………… 適量

普通じゃない魚 …………… 一尾

トラック …………… 一台(中土)

スイカによく似た何か …………… 適量

「なんか変な色してないか」と森下が変な顔で言った。

「気にしない気にしない」

大きなミキサが工事現場のような音を立てて動きました。

「おいおい。お前ちよつとおかしいぞ。気色わるい。色も何か変だぞ」

「まあ飲んでみなよ」

「やだよ」

「そう言わずに」

森下は顔の中心に深い皺を集めながら、ゴクゴクと音を立てて飲んだ。

ちびちびではないところが僕は好きだ。

「信じられん」と森下は言った。

「美味いだろ？」

「美味くはない。決して。でも不味くもない。絶妙なバランスだ」

「ほう」

「言葉にはし難い何かがあるな」

そりやそうだろう、と僕は思った。

そのバナナジュースを作ったのは僕なのだから。

バナナを育てたのも僕だし、牛乳を搾ったのも僕だ。氷だって自前で準備したし、他の材料を揃えたのも僕だ。そのバナナジュースはこの世でたった一つしかない、僕の作ったバナナジュースなのだ。

「お前あれだな」と森下が言った。

「真正のバカだな」

## 12、彼女は万畑悠季と呼ばれている

ある日の午後、僕はいつものように彼女の部屋へと向かった。もちろん部屋の片づけをするためである。彼女の部屋に堆積した地層は、初めて見た時よりもはるかにその体積を減らしていた。

ユーラシア大陸がインド島くらいになった、的な。

その日の僕は少し浮かれていたのかもしれない。それは朝起きたときの空気がいつもよりも涼しかったからなのか、割った卵から二つの黄身が出て来たからなのか、空が綺麗な空色だったからなのか。

いずれにせよ僕は彼女の部屋の前、つまりアパートの扉の前に立つまで、その違和感に気がつかなかったことになる。

違和。

それは微かで、微々たるもので、微量で、ほんのわずかなものだった。

彼女の部屋が——というよりはアパートそのものが——

静かすぎた。

彼女の部屋の扉には鍵が掛かっていなかった。中はうす暗く、相変わらず物が堆積していた。

だけど僕は、彼女がこの場所から去っていったことがわかった。

それくらい部屋が静かだったのだ。

まるで生活の音を失ったかのように。

僕は少しばかり立ち竦んだ後、丁寧に部屋をチェックすることにした。彼女が何らかのメッセージを僕に残しているかもしれないと思ったからだ。

——何か変化はないか。部屋に何か変化はないか。

念入りに。念入りに。

質の悪い脱出ゲームをやっているかのように。

しばらくの間僕はそうして何かを探していたが、結局何も見つけれなかった。

前回僕が来た時と変わっていたのは、白いギターが無くなっていることくらいだった。

### 13、草原の果て

ある夏、僕のバナナ畑は終わりを迎えた。

それはきつと新たななはじまりでもある。

果てしなく広がる草原を見て思う。

先人たちは偉大だ。

昔の地図は今ほど正確ではなかったはずだ。

いや、今でも正確ではないけど。

少なくとも現代には地図らしきものがゴロゴロと転がっていて、それを自由に扱えるという時点で先人に感謝せねばなるまい。

なぜならそのおかげで、森を構築してそれを突破し、草原までやって来ることの難易度は昔に比べると多少な

りとも下がっている筈だからだ。

ただし、その先は自由だ。

それはいつの時代も変わらない。

はずだ。

もう先人はいない。

ここにきて多くの人は気がつくのだろう。

小説は宇宙のようなものだ。

この夏、バナナ畑は終わりを迎えた。

人生において。

と主語を大きくしてみる。

僕は思う。

人生において。

誰と出会うかはさほど重要ではない。

いつ、誰と出会うかが重要なのだ。

これは僕の持論で、ポリシーだ。

だから大抵の人は疎遠になる。

あえて疎遠を貫いているわけではない。

何となく疎遠になっていくのだ。

だけでもちろんそれは、その人々の不幸を願っているわけではない。

僕は願っている。

出合い、同じ時を過ごし、別れていった人々の幸せを。

いつまでも元気で過ごし続けて欲しいと。

いつまでも変わらず。

いや、変わってもいい。

生きていてくれればそれでいい。

少なくとも僕が元気でなくなるときまでは、だからこそ僕は思う。

あれがタイムマシンであればいいと思う。

草原の空の彼方、雲のすき間を切り裂くようにして、

赤く燃えるように流れていく一つの星が、誰かのタイム

マシンであればいいと思うのだ。

ほんとうに思うのだ。

ほんとうに思うから、僕は泣く。

### 14、もういちど、白いギターのはなし

単純に空の色とは言っても、空の色は季節によってだいぶ違う。

気がする。

だから僕は次のように定義することにした。

空色とは、良く晴れた夏の日の午前10時から午後三時までの間、水蒸気や埃の影響の少ない大気の状態における僕の家から五〇〇メートル以内の上空を、厚紙に十センチ四方の穴を開けてそれを目から約三十センチ離してかざし、その穴を通して観察した色のことを指す。云々。要するに、空色とは水色よりも少しだけ空に近いものであればいいのだ。

そしてそんな空色がとても綺麗で、炭酸水のように雲がぽこぽこと湧き出る日の昼下がりに、彼女は僕の目の前から鮮やかに去っていった。

まるで端からそこには誰もいなかったかのように。

でももしかしたら、と僕は思う。

もしかしたら、それは彼女なりの優しさだったのかも  
しれない。

形あるものは大抵の場合、最後は灰になって崩れ去る。  
だから、形ないものをどうにか形にしようとしている

僕はバカだ。

でも、僕はどうしても、はじめからそこにあつたかのように捉えてしまう。

だからこそ、彼女ははじめからそこには何も無かつたかのようにいなくなつたのかもしれない。

つまりだ。

これは彼女なりの優しさだつたのかもしれないのだ。

もしそうだとしたら、と僕は思う。

もしそうだとしたら、仕方がない。

仕方がない。

仕方がないといしか言えないのだ。

しかし。

もしそうだとしても。

しんどいものはしんどいですなあ。

僕はそう思う。

\*

部屋にはその人の人生観が表れる。

これは僕の持論だ。

物で溢れかえっている部屋には生活感がある。

美しく整理整頓されている部屋には清潔感がある。

空洞のように何も無い部屋には、何もない。

万畑悠季の部屋は実に混沌としていた。まるで西洋の

古い地図のようだった。ありとあらゆるものがインク

のようにとつちらかり、まるで大陸の地層のように堆積

していた。

「私は物を捨てない主義なんだ」と彼女は言った。

暑い昼下がりのことだった。

「見ればわかる」

「麦草くんを呼んだのは他でもない。この部屋の片づけを手伝ってほしくて」

「それも、見ればわかる」

\*

そんな感じで何一つとして物を大事に扱わないように

見えた彼女だつたが、白いギターだけは違つた。

胴体が牛乳のように光り、英字が美しく書き殴られて

いるシンブルで良質なギター。

部屋の隅に立てかけられた名も無きギター。

彼女がそのギターを弾いているところを僕はほとんど

見たことがない。触るところもほとんど見たことがない。

ほとんどない。

一度だけある。

でも僕は、彼女の演奏がどんなものであつたかあまり

良く覚えていない。

歌は上手かつたか。演奏はどうだつたか。曲はオリジ

ナルだつたか。

あまり良く覚えていないということは、おそらくそう

大したものではなかつたということだろう。

彼女には悪いけど。

なにせ僕は、あまり良く覚えていないということは今

でもしつかりと覚えているのだ。

そしてあまり良く覚えていないということを今でもし

つかりと覚えているということは、やはり彼女の演奏は、

おそらくそう大したものではなかつたということだろう。

なんてことを当時の僕は考えて続けていた。

彼女が去つてから一か月くらいの間ずっと考え続けて

いた。

そのせいか、僕は彼女が白いギターを演奏している夢をよく見る。

空が綺麗で、灰色の雲が流れていて、白いギターがあつて。

そして目を覚ました時には、彼女の演奏がどんなものであつたか全然覚えていないのだ。

でも僕は最近、彼女の夢を見ない。

さっぱりと。

いつの間にか、彼女はただの友達に戻つたようだつた。

## 15、バナナのおわり

僕は昔からバナナが好きだつた。

黄色いペンキを塗つたかのように鮮やかな皮とか、ペ

ンチでぐにやりと曲げた感じの实の形とか、草原を駆け

抜けるかのように爽やかな甘みとか。

バナナには妙な魅力がある。

そして、その中でも僕は格別、バナナジュースが好き

だつた。

もちろん今でも好きだ。

なによりも好きだ。

なによりも好き、すぎて、変な夢を見た。

ずいぶんと懐かしい夢だつた。

ずいぶんと懐かしい人が出てきて、ずいぶんと懐かし

いことを言った。

僕は少し泣いた。

そしてずいぶんと懐かしい気持ちで目を覚ますと、ず

いぶんと懐かしいベッドの脇にずいぶんと懐かしいバナ

ナジュースが置いてあつた。バナナジュースはずいぶ

と懐かしいコップにずいぶん懐かしい感じで注がれていた。  
たふたふ。

そんな夢だった。

\*

「正直なことを言えば、俺にはもう違いがわからん」  
ある日の昼下がり、森下は淡々とした様子で僕にそう告げた。

僕は森下のその言葉に少なからず衝撃を受けた。

何百杯目のバナナジュースに対しての言葉だ。

覚悟はしていた。

僕はそういうことをしているのだと、自覚はしていた。  
ありとあらゆるものを研磨剤にして、けずってけずって、けずってけずって。そうして研ぎ澄まされた何かで、何かを貫けると信じて、信じて。

そうして、いつしかついてこれなくなったものは、そのまま置いていくのだ。

まるで端からそこになかったかのように。

「ごめん」と僕は言った。

「善悪の問題じゃない」

そう言つて森下はフツと鼻を鳴らした。

「俺の出番はもう終わったつてことだよ」

人生には幾つもの出会いがある。

人にも、本にも、食べ物にも。

もちろん、バナナジュースにも。

服に染みついたバナナジュースのように、しっかりと存在している。

彼らにも色々と言ひ分はあるだろう。でも本質はそこ

ではない。

誰と出会うかではないのだ。

誰と、いつ、出会うか。

「絶対にあきらめんなよ。お前」と森下は言った。

「うん」

「一生だぞ」

「うん」

「何が何でも追い続けろよ。絶対に」

森下は僕の胸をボスと叩いて、水草の待つ部屋へと去つていった。僕は鼻水を吸った。鼻水はとどまることを知らなかった。

「あ、そうそう」

森下が扉からひよいと顔を出した。

「悪かったな。最後まで手伝えなくて」

孤独だ、と思つことが何度もある。

僕のこと、僕の本音が本当に正しいことなのか迷つこともざらにある。

当たり前だ。

僕は自ら好き好んでそういうことをしているのだから。

それが何かを貫くために必要なことだと思つているし、

これからは僕は喜んでその道を歩んでいくだろう。

それでも、僕はふと立ち止まって考えることがある。

今まで置き去りにしてきたものが、足元に、地層のように積みあがっているのを見て思うことがある。

僕は何かを追いかけるには、少なからずこだわりが強すぎる。

そうではないかと考えたりする。

\*

当時の僕はバナナジュースの研究をしていて、森下は水草の研究をしていた。

こんな感じで。

「甘ったるくて頭がおかしくなりそうだ」

森下は顔をしかめながらそう言う。

僕は別のコップを彼に差し出す。

彼はこれでもかというほど眉間にしわを寄せると、ぐ

びぐびとそれを飲み干す。

ちびちびではないところが僕は好きだ、とか思つたり

する。

「さっきよりは上品な甘さだ」

「おお」

「でも深みがない」

彼は不快そうにげつぷをする。

僕はそれを見届けると、大きな水槽を抱えて近くの川へと向かい、彼の研究に役立ちそうな水草を山盛り採つてくる。

教室の隅に積みあがった、汚いコップと枯れた水草が

当時の僕らの誇りだった。

僕は、服に染みついたバナナジュースのように、いつ

までも記憶に残るバナナジュースを。

彼は、どんな環境でも生き残っていける外来魚のような、たくましい水草を。

僕らはけっこう若かったのだ。

「なんで水草を研究してるんだ？」と僕は尋ねた。

彼は水槽にじよぼじよぼと水を入れながら、しばらく考えた後、

「お前と一緒さ」と言った。

「ずいぶん懐かしい夢を見たんだ。ベッドの脇に水草が積みあがってる、ずいぶん懐かしい夢を」

そんなことを彼は言う。

そうして僕らは毎日を過ごす。

## 16、エピソードの少し手前

彼女——万畑悠季についての話はこれで終わりだ。

なんのことはない。

彼女はある時期に僕と出会い、自分の部屋の片づけを手伝わせ、「よく言えば」意味深な言葉をつらつらと吐き、なんらかの理由によって僕に別れを告げずに去っていった。

ただそれだけのことだ。

出会いと言っても同じ専攻であったというだけのことだし、部屋の片づけは体の良い人足程度の認識だったのだろう。彼女の吐く意味深な言葉は、きつとアメリカ文学にかぶれたへっぽこ学生のそれだったのだろうし、別れを告げなかったのはカッコをつけたかっただけだ。どうせ。

僕は大学時代に戻りたいと言った。

やり直したいとも言った。

彼女が最後、タイムマシンを使って部屋からかっこよく去ったと主張するなら、僕は彼女が去った日の前日、深夜のアパートでこそそこそこかへ行くこうする彼女に言っただけだ。

なによりもでかい声で言っただけだ。

## ダサすぎる、と。

きっと彼女は鳩が豆鉄砲を食ったような顔をするだろう。なにせ彼女は自分のことをロックだと思っただけだ。

それでいい。

むしろそうであってほしい。

彼女はそうでなくてはならない。

本当にタイムマシンが存在していたのではないかとほんのわずかでも人に思わせるような、そんな彼女の純粹さが僕は好きだったのだから。

そんな彼女は、万畑悠季と呼ばれている。

## 17、THIS IS バナナ

僕は、僕が過こして来た日々がそれなりに好きだったりする。

だから、単に消費され、失われていってほしくない。

そういう思いで言葉を繋いできた。

形のないものを形にする。

それがうまくいったのか、それとも大きな失敗だったのかは、僕が決めることではない。

ただ、今ある言葉では、うまく言い表せないことも多くある。

たとえば、あの時代のこと。

——今にして思えば燦然としていて

——煌々としていて

——燦爛としていて

——赫赫としていて

——炯々としていて

今ある言葉では中々うまく言い表せない時代のこと。

何度も言っているように、言葉というものは実に不完

全で、不安定なものだ。

たぶん。

なにせ必要なときに必要な言葉がない。

そんなことがしょっちゅうだ。

だから僕は、自分だけの言葉で、僕の過こした時代に、新しい名前をつけることにした。

「バナナの時代」と。



18、ここだけの話

私の友達はね、こう言うんだ。

「どんな小説も、書き終わったら勝手にタイトルが決まるものさ」ってね。

そういうことじゃない？

どんな人生も、生き終わってみれば勝手にタイトルが決まってるもんさ。

なんて。

かっこいいことを言ってみただけ、一応、もしもの話をしておこうかな。もしも、君があのととき優しさを押し殺していたら、の話。

そしたら君は順調に進学して、それなりの大学に入っ  
て。ひよんなことからサークルに入部して、個性的な部  
員から多くの刺激をもらって。喜怒哀楽織り交ぜながら、  
それなりに楽しい大学生活を送ることになっていただろ  
うね。

そんな人生も悪くないさ。

今のきみの人生も悪くないと思うけど。

いや、どんな人生も悪くないな。

そもそも善悪の話ではないもんな。

単純に、あるかないか、それだけの話だもんな。

そうさ。

これからもきみの人生は続く。  
色んなものをかき混ぜながら。